

占星術と天文学との関係、その歴史（續き）

Astrology and Astronomy, their History.

吉岡 修 一 郎 Syuitiro Yosioka.

5.

占星術の芽生えはバビロンにある。バビロンの天文学は占星術そのものに他ならなかつたらしい。（後世の占星術のやうに精細なものでなかつたのは勿論だろうが。）紀元前三千年、この土地に住んでゐたシュメル人は既に天體を信仰してゐて、太陽と月を主神とし、五つの遊星を大神としてゐた。そこからして、既に述べて來たやうな人間心理の動きによつて、占星術が生れた。天文觀測の必要はそこから當然出たが、しかし、彼らの思考様式から言へば、天文学と占星術との分化はなかつたと言ふべきだろう。

現在の週（七曜）の起源が、このバビロンにおける七つの天體の崇拜にあることは疑ひない。そこから又、“七”を神聖數とする思想も由來してゐる。また天道を十二宮に分けたことと、角の360度制が生れたこととは密接な關係があつたに違ひないが、いづれにしても、これが現在の西洋特有のダース（十二）の思想や、角の六十進法の起源になつたものだ。

地球を360度に分けたのは三千年前のエジプトが最初だといふ。（タイラー、セヂク。）エジプトの天文学は占星術ではなかつたかも知れないが、しかし、そこにあつた宗教的動機には、やはり占星術に似た思想が含まれてゐただらうと思はれる。

バビロンやエジプトの文化を受けついでギリシャ人の興味は、占星術などにはなくて、理論的な科學の方にあつた。しかし、それでも、ピタゴラスの『天體の音楽』といふ思想や、更に、この學團が科學や數學の眞理を道德的、宗教的價值と混同（觀念聯合的に）してゐる所などには、占星術と同様な思考様式がないとは言へない。而も、當時、ピタゴラス派の勢力は國家的なものだつたのだ。

中世にはいと、宮廷には、占星術者が、幫間と同様に、缺くべからざるものになつた。十四世紀のフランスの『賢王』シャルルでさへも、占星術の熱心な信者だつた。御用占星術者がゐて、それがシャルルの内閣の名譽ある高官だつた。なぜなら、國家や王室の大事を豫知して、それに對策を施すために、彼はなくてはならぬ國家的重臣(?)だつたのだ。勿論、豫言はいつも曖昧で、それが當つても當らなくても豫言者に有利なやうに出來てゐた。災禍の豫言をして

その災禍が實際起つた場合には、それを避けるためになされてゐた對策が無効に終つたわけだが、それは“運命が強固だつたためだ”と説明される。もし災禍が起らなかつた場合には、“對策が効を奏した”といふ解釋になる。煉金術の熱心な信者だつたボヘミヤ王ルードルフ二世も占星術に熱中した。

十六世紀の有名な占星術者、ノトル・ダムのミシェル（1503—1566年）は通稱ノストラダムス（Nostradamus）と呼ばれてゐるが、これが、全歴史を通じて最も有名で、『占星術の王』と言はれてゐる。宮廷醫であり、著述家であつて、占星術の本や豫言書を澤山出した。そのうちで、「百句」といふ韻文の豫言書が一番有名で、各國語に翻譯され、重版された。（勿論それらの豫言には、歴史上當つてゐると思へるものもあれば、さうでないものもある。）

ゲーテやシッレルの文學の中に占星術者のことが出て來るが、ゲーテの「ファウスト」には、このノストラダムスの名前が出てゐる：第一場の中の文句に、

『して、ノストラダム自身の手になる

この神秘の書。

それがお前〔自分〕には結構なお子供ぢやないか？』

とあるのは、勿論占星術の書物なのだ。

十七世紀には、代表的な占星術者の一人にイギリスのウィリアム・リリー（Lilly）といふのがある。彼は、1640年頃に、占星術の理論と實際とを最も詳細に記述した書物を出した。これは、それまでの歴史に現れた占星術のあらゆる記録から集めたものだといふ。彼はそのために、同業者からは、商賣の秘密を洩らすものとして、いつも非難されたらしい。

十八世紀の中頃にもなると、占星術者の數が激増して、能力はひどく低下したといふ。そして、夢占ひ、透視術、神おろし、その他いろいろの形をとるやうになつた。今日でも盛んに流行してゐる。而も、信者たちに言はせると、教育が普及し、教養が高まつたからこそ、かういふ神秘術が盛んになつたのだと言ふ。

6.

例の有名な天文學者ケプレル（1571—1630年）でさへも、占星術をやつた。また、それより少し前のイタリヤの數學者で醫者のカルダノ（1501—1576年）や、ウラニエンボルクの天文臺におけるテュコ・ブラーエ（1546—1601年）も占星術をやつた。殊に、テュコ・ブラーエの熱中ぶりは大變なもので、それについてはスウェーデンのアレキススの「科學的宇宙觀の變遷」といふ書物に詳しく出てゐる。（邦譯は寺田寅彦。）その一部を私は「數學茶話」の357頁以下に引用しておいたが、彼は、天候の變化や、疫病の流行、更に人間の氣質體質、内臓の

各部の働きなどを、すっかり天體に結びつけて説いてゐる。彼は、コペルニクスの地動説を信じないで、死ぬまで占星術を擁護して、戦つた。“占星術に反對する者は健全な判斷力がないのだ”とテュコは斷言した。しかし、このやうなテュコの觀測した天文學上のデータそのものは、やはり天文學に大いに貢獻してゐる。

ケプレルの天文學上の或る思想が、随分馬鹿げた迷信に過ぎないといふ話は拙著「數とロマンス」314頁以下や、「數學千一夜」188頁以下に書いておいた。彼の天文研究が凡て、神秘思想を目的にしてゐたといふことを私は書いたが、しかし、彼が占星術を本氣で信仰したといふことは肯定出来ない。彼は占星術の科學性を否定してゐたらしいし、自分自身が占ひ曆などを書いたのは、單に暮しの種に過ぎなかつたらしい。彼の言葉に、かういふのがある：

『天文學は賢母であり、占星術はそれから生れた馬鹿娘だ。馬鹿娘とはいひながら、老母を養つて行くのは娘の働きだ。』
解し様によつては随分痛快な皮肉にもとれる。

三十年戦争における皇帝軍の元帥ヴァレンштаインはいつも占星術者を連れてゐて、それに頼つて行動をとつてゐたといふが、その占ひ曆といふのが残つてゐない。所が、ケプレルがこの將軍のために作つたといふ占ひ曆が一つ残つてゐる。しかし、勿論、それは、この將軍の暗殺までも豫言してはゐないが。

7.

占星術の理論組織は極めて精細なものなので、新しい遊星の發見などは、その全組織をゆるがすことになる。ガリレオの木星の衛星の發見では、影響はさう大きくなくて、少しの修正でよかつた。所が、1781年のハーシェル天王星の發見では、占星術は大變な騒ぎになつた。科學として充分進歩したこの天文學上の事實は、無視するわけに行かないし、さうかと言つて、逆に從來の占星術の理論をくつがへすわけにも行かない、といふディレンマに立つた。

イギリスの占星術者で、その方の著述家のスミス(匿名ラファエル)らは、古い占星術の理論を誤りだとして、改訂することにした。彼は、太陽を主とする占ひ曆がいけないといふ口實で、月の影響力を一層尊重することにして、天王星も他の遊星の仲間に入れるやうにした。

所が、1846年にまた海王星が發見されたので、益々問題が面倒になるわけだつた。しかし、この海王星の占星術的勢力については、將來の研究に待たうといふことになり、また、次のやうな巧妙な(そして、ずるい)想定が加へられた。即ち、海王星が他の遊星に會合するとき、その遊星の勢力を強め、對衝するときは、その遊星の勢力を弱めるのだといふ。

上記のラファエルの中に、次のやうな韻文の(これが屢々ある形式だが)占星理論が引用されてゐるといふ:

月がアリエスにあるとき、命は長く、
 タウルス、ゲミニ、カンケルにあれば強い。
 しかし月がレオンで争ふときは、
 人間の命は全く短くて、苦痛に満ちてゐる！
 ウィルゴでは、汝は、彼女が忠實であり
 幸福で正當で、且つ愛情深いを見るであらう！
 しかし、それでも人間の年は、短くて、僅かだ！
 そこで、彼女のつかの間のリブラ通過の速さを眺めよ。
 生命の焰を、彼女は絶えず嘯み、
 動作と行ひとにおいて、名高くするであらう！
 歎け！スコルピオに、彼女がサギッタリウスの
 矢を追ふとき！筋と
 腿との力よ、力強い優美、この後者の宮よ！
 長い命と幸福とは、そのとき汝のものだ！
 カプリコルヌス、アクッリウスでは、短いが、
 しかし、ビスケスは、運命の投槍を絶えず見守る。』

以上のやうに見て來ると、この占星術といふ迷信には、賭博などのやうな遊戯の要素がかなりはいつてゐると思はれる。そして、このことが、又、占星術のいつまでも榮えてゐる一つの原因ではなからうか。ともかく、これは一つの問題になり得ると思ふ。(終)

冬の星 (8句)

冬嶽に向けばこぬれに星移る	幸	彬
カシオペア蝙蝠のごと野の冬至	雄	一
星空のもとの凍土踏む兵馬	縁	章
星凍つる夜半黒服のゆく聲音	亨	福
肇國の光秘め星が凍ててゐる	嶺	子
歴史生るゝ日のオリオンは澄みまさる	矩	生
夜々を冴え天狼寒く窓に展け	昌	久
退勤の北斗の窓に寒波來る	支	魚